
キセキノキオク

ちりちり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キセキノキオク

【Nコード】

N2638E

【作者名】

ちりちり

【あらすじ】

大学進学を前に懐かしいアルバムを見つけ自身の過去を振り返る

キオクノヒカリ

人は時が過ぎるにつれ大事なものを無くしてしまふ。

大事なものを無くした悲しみも痛みも段々薄れていく。

また前に進めるようになる。

すべては想いと共に僕の中に生き続ける・・・

「・・・ふう、一息ついたかな」

春からの新生活に向けて引越しの準備をしていた僕は軽いため息をついた。

大学進学で故郷を離れての一人暮らし、不安と期待が入り混じった不思議な感じだった。

ジューズでも買いに行こうと外に出た、もう春だというのにそとはまだ肌寒かった。

まだ五分咲き程度の桜並木を歩きながら、僕は少し感傷に浸っていた。

この桜が満開になるころには僕は他の土地で生活している。

子供の頃から馴染みの景色が見れないとなると、なんだか寂しいものがある。

そんなことを思いながら家に帰り部屋の中を見渡す、そこに懐かしいアルバムを見つけた。

それは僕にとって忘れえぬ記憶、決して色褪せない思い出だった。それは約二年前に遡る・・・

高校二年の春の事だった、僕のクラスに転校生がやってきた。

「転校生を紹介します。入ってきてください」

担任教師がそう告げる、扉の向こうから現れたのは・・・女の子だった。

「では自己紹介を」

担任に促され彼女は自分の名前を黒板に書いた。

「桐原希望といいます。これからよろしくお願いします」

キリハラノゾミ、希望と書いてノゾミと読むんですよ。

彼女はそう言った。

小柄で髪は肩につくぐらい、愛嬌のある顔でいつも笑顔だった。

屈託のない笑顔で明るく正に天真爛漫という感じですぐにクラスにも馴染んでいった。

新学期から二ヶ月を過ぎたある日、梅雨の到来を思わせる鬱陶しい雨雲が空に広がりだした時に、

彼女が病欠した、軽い体調不良だそうで、まあよくある事だろうと誰も気に留めなかった。

しかしそこから一週間彼女は姿を見せなかった、流石にクラスの中でも話題に上る。

担任の話では風邪をこじらせた、ということでも長引いているのとのことだった。

お見舞いの話が持ち上がり、日直が二人で行くという事になったので、僕と女子の二人が

クラスを代表して行く筈だったが、パートナーが病欠のため一人で行くことになった。

僕は少し緊張していた。別に異性の家に行ったことがないわけじゃないけど、一人で行くのは初めてだったし、

彼女とは何度か話したけれどそれほど親しいわけではない。

そんなことを考えながら彼女の家に着いた、呼び鈴を鳴らす。

「はい、どちら様ですか？」

インターホン越しに母親らしき女性の声が聞こえた。

僕は少し緊張気味に、

「希望さんと同じクラスの高城優介といいます。クラスを代表して

お見舞いに伺いました」

要件を告げる、すると

「少々お待ちください」

と返事があり程なくしてドアが開いて僕は中に入った。

彼女の部屋に着くと、ノックをして母親は僕が来たことを告げた。

「どうぞ」

そう返事が返ってきたので部屋に入る。

「やあ、久しぶり、気分はどう？」

遠慮がちに声をかける。

「お蔭様でなんとか良くなってるみたい」

少し弱々しく答える。

「お母さんお茶入れてくるわね」と

母親が退室した、なんともいえない空気がながれる。

（困った何話をそう）

そんなことを考えていたら

「そこ座ってよ、少し話がしたいの学校とかクラスのみんなのこと聞かせて？」

と彼女のほうから切り出した、おずおずと座布団に腰を下ろす

僕は彼女にいろいろ話して聞かせた、去年の文化祭や体育祭、担任や良くつるむ友人、など他愛もない話だったけど、

彼女はおどけて見せたり、笑ったり羨ましがったりしていた。

「もっと早くに転校したかったな」

そんなことを言っていた、僕の緊張はどこかに行ってしまったようで、とても楽しかった。

時間があつという間に過ぎた、そんな感覚だった。

時計を見上げると19:00を過ぎたことを告げていた。

「ごめん少し長居したみたいだね」

と僕は彼女に告げた、少し残念そうに

「もうこんな時間なんだ」

と時計を見ていった。

「そろそろ帰るね、あんまり長居しても悪いし」

「今日はありがとう。とても楽しかったよ」

「じゃお大事に、また学校で会おうね、まってるから」

そう告げて僕は彼女の家をあとにした。

それから三日後、彼女は学校に戻ってきた。

すっかり良くなったらしく、休み時間は女子と談笑する、いつもの元気な声が聞こえた。

その日の昼休みに、彼女から放課後、家に来てほしいと誘われた。なんでも休みの間の授業の内容を聞きたい、とのことだった。

放課後、二人で一緒に彼女の家に行く。

「急にごめんね。ずいぶん休んじゃったからなんとかとりもどしたいの」

少し申し訳なさそうに言った。

「いや、大丈夫だよ。特に予定ないしね」

軽く答える

「じゃ始めましょ」

「うん」

そうして二人だけの勉強会が始まった。

約1時間30分程、机に向かい合って授業内容の復習をしていた。

「そろそろお茶にしましょ？」

そう切り出した彼女は

「いま用意するから少し待ってて」

と残しキツチンへ降りていった。

残された僕は二度目とはいえ女の子の部屋にまだ少しドキドキしていたのだった。

お茶も兼ねての休憩中に彼女は少し自分の事を話してくれた。

少し体が弱いこと、転校を繰り返していたので友達が出来ない事、など

普段の姿からは想像出来ないぐらいに、寂しそうに僕に話してくれた。

その日から放課後の勉強会は二人の恒例行事となった。期末テストも終わり、

夏休みも近づき校内には夏の暑さと共に活気が満ち溢れていた。

その少し前ぐらいから、クラスにある噂が流れていた。

高城と桐原が付き合ってる、というものだった。

まあ確かに毎日放課後に一緒に勉強してたり、休日に市内探索に二人だけでいけばそういう風に思われるのだろう。

勉強よりも色恋に興味津々の年頃だし仕方ないことだと思う。

「もう告ったの？」

なんてからかわれたりもしたけど、恥ずかしいというより僕はなんだかくすぐつたいようなかんじだった。

「私たちはなんでもないから」

その日の放課後の勉強会で言われたその言葉に少し言葉が出なかった。

「私たちはクラスメイトでただの友達。それ以上でもそれ以下でもないから、勘違いしないでね」

その後のことは良く覚えていない、どうにか平静を装い、家に帰ってベットに潜り込んだ。

頭の中を彼女の言葉が渦巻いて、勘違いしていた自分に嫌悪感とか恥ずかしさがこみ上げてきた。

次の日から僕は彼女を避けるようになっていた、勉強会も参加せず家に帰った。

彼女とあまり顔をあわせたくなかった。

「ただの友達、勘違いしないで」

その言葉だけが頭にこびり付いていた。

そんな陰鬱な気分を迎えた夏休みだった。

八月を過ぎたある日、ケータイにメールが来ていた。

彼女からだった、文面は、どうしても話したいことがあるから家に来て欲しいと書かれていた。

一瞬嬉しさがこみ上げたがすぐに押し込んで、メールじゃ駄目なの

かと、返信する。

すぐに返事がきた、駄目、大事なことから会って話したい、と仕方なしに僕は彼女の家に向かった。

そこで僕は彼女からとても大事なことを打ち明けられた。

家に着いて部屋まで行くと、パジャマ姿でベッドに横たわっている彼女がいた。

「来てくれたんだ。ありがとう」

力なく挨拶し身を起こす。

「あのね、大事なことっていったでしょ？」

「うん」

「私の体のことなの」

僕は少し混乱していた、あの太陽のような明るい笑顔は？いつも元気なあの姿は？

今僕の目の前の彼女は、衰弱し話すのもつらそうだった。

「まずはごめんね。酷い事言って」

そういつて頭を下げた。

「あの日の少し前にお医者さんに言われたの」

「なにを？」

聞き返した僕に少し間を置いて

「・・・もう永くはないって」

「え・・・」

「前に言っただでしょ？体が少し弱いつて」

「うん」

「今までは薬でなんとかってたけど、体がもう限界みたいなの」

「来年の春まで持つかかわからない、そう言われたの」

「・・・」

黙って聞いていた、というより何を言っただいかわからなかった。

「それを聞いてあたし悔しくて、寂しくて、どうしていいかわからなかった」

「いまがとても楽しいのに神様はなんで不公平なんだろうって泣い

てた」

「だから優介君にも八つ当たりしちゃったの・・・ごめんね」

「・・・そうだったんだ」

何とか声を絞り出す、何を考えていいか思いつかなかった。

「そしてもうひとつ大事なこと」

「え」

「私は・・・」

そこで言葉をとめる。

「私は高城優介君が大好きです」

突然の告白だった。

ほんとだったら飛び上がるくらいに嬉しいはずなのに、今日の前の彼女を前に僕は何もいえなかった。

「迷惑だつて分かつてる、私はもうすぐ死んじゃうのにな」

「でも伝えたかった、本当の気持ちをも、」

言葉を出せずに居ると

「今日はそれを伝えたかったの、ありがと来てくれて」

「また来るよ」

どうにか様になるように別れを告げた。

その日は眠れなかった、必死に考えていた。

僕が好きだと言ってくれた、希望に何が出来るのか？

考えても考えても何も思いつかなかった、無力だった。

だつてそうだろ、これから死に逝く少女に僕が出来ることがあるのか？

頑張れ、大丈夫だ、きっと良くなると、根拠のない楽観を押し付けるのか？

それとも死ぬときは一緒に逝こうと、出来もしない慰めで気を紛らわすことか？

世界最高クラスの治療を受けさせることか？そんな金もコネもない。あまりに小さい自分に涙が出てきた。

どんなに悲しんでも考えても人は欲求には勝てないもので、僕は少

しずつ眠りに落ちていった。

目が覚めたのは翌日の夕方だった。ケータイの着信音だった。

電話の相手は希望だった。

「もしもし？優介君？」

電話の向こうから聞こえてきた声は昨日の弱々しい声ではなく、学校で聞いた元気な声だった。

寝起きの声で答える

「あー希望？おはよー」

「今起きたの？駄目だよ夜更かししちゃ」

「あーうん分かってる」

「ほんとかなー？」

「大丈夫だよー、んでどうしたの今日は？」

「今日の夜空いてる？花火しにいこうよ」

「花火？どこで？」

「河川敷で。いいでしょー？」

少しずつ僕の頭が回り始めてきた。

「花火って、体は大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫、心配ご無用だから」

確かにずいぶん調子が良さそうだけど、念を押す

「ほんとだな、無理してないな？」

「うん」

僕は少しでも気晴らしになればと花火をすることにした。

途中のコンビニで待ち合わせて、そこで花火を買った。

いろいろ入って1500円ぐらいのバラエティーパックだった。

打ち上げ花火やドラゴン花火いろいろ楽しんだ。

「さて最後は線香花火でキマリ」

希望はそう言って火をつけた。

やがてぽとりと火のついた部分が落ちた。

「なんだか切ないね。綺麗に輝いても一瞬で無くなっちゃう」

僕は黙っていた。

「ありがと、なんだか気が晴れた」

と言って立ち上がった希望を僕は思わず抱きしめていた。

「ちよつ、優介君？どうしたの？」

希望が驚く。

「君が好きだ」

「そばに居ることしか出来ないけど、君のそばに居たいんだ」

少し体を強張らせていた希望が僕の体を抱きしめる。

「うれしいよ」

そういつて涙ぐんだ。

何で僕がこの時そうしたかは今も分からない、そうしなくちゃいけないって思ったんだ。

僕たちは彼氏彼女になった。

それから毎日が楽しかった。

休みが明けて修学旅行と一緒に過ごした。

文化祭を過ぎたあたりから、希望は徐々に欠席が多くなった。

お見舞いに行つてはその日学校であつたことやクラスの連中の話をした。

クリスマスが間近に迫りプレゼント選びに四苦八苦し

二人だけでクリスマスを祝った、その頃は大分衰弱して起きるのも辛そうだった。

「私今こんなに幸せなのに、なんで死んじゃうのかな？優介君と一緒に生きていきたいのに」

「いやだよ。死にたくないよう。なんで私ばかり・・・私が何か悪いことしたからかな？」

希望は泣いていた、迫り来る死の恐怖に怯えながら生きている最愛の人を僕はただ抱きしめることしか、出来なかった。

二月に入り希望の容態が急変した、意識を失い集中治療室に運ばれた。

家族に医師からもう手の施しようが無いと宣告された。

希望が意識を取り戻したのは桜の蕾が膨らみかけた三月のとある日

だった。

僕が部屋に入ると希望が力なく僕に挨拶した

「ごめんね。急にきて貰って・・・」

「あのね・・・最後になると思っからお別れを言いたかったの・・・」
途切れ途切れ希望は言葉を紡ぐ

「短い間の生涯であなたに出会えた、この10ヶ月とても幸せでした」

「なに言っただよ？お別れって」

「ほんとはもつとたくさん生きて一緒に思い出つくりたかったのに・・・ごねんね」

希望は泣いていた、僕も涙を止められなかった。

「お別れだけでも少しも私は寂しくないよ・・・楽しい思い出沢山もらったから・・・」

最後の強がり。

「僕も楽しかった、幸せだった」

「ありがとう・・・ごめんね」

「謝ってばかり」

少しあきれてみる

「そうだね・・・ごめん」

「ほら、また」

「そうだねフツ・・・ねえ優介君もつと早くに会いたかったね・・・」

僕は泣いていた

「もうすぐお別れみたい・・・また会いたいな・高・城・優・・・・」

最後の言葉聞き取れなかった。

希望が逝った、僕はただ声を上げて泣いていた。

僕是最愛の人を失った、世界にとっては60億人の一人が消えたに過ぎないだろう。

けれど僕にとっては世界を失った・・・

後で知ったことだけど、希望はずいぶん前から大分無理していたそう
うだ。

かなり強い薬で、体調を誤魔化していたそうだ。

花火の日に薬を飲み始めたということだった。

最後の思い出を作ると副作用に苦しみながら頑張ったそうだ。

希望を失った僕は深い悲しみに包まれていた。家族や友達も僕に気
を使ってくれたり励ましたりしてくれた。

でも心に大きな穴が開いたまま時間だけが過ぎていった。
そして・・・

僕はいま卒業し新生活を始める。

いまも希望との思いを胸に・・・

時間が過ぎるにつれて、悲しみは虚しさは薄れていった。

少しずつだが彼女の声や仕草、表情などが薄れていく。

やがては思い出になり、記憶の彼方に追いやられてしまふと思うと
少し寂しい。

昔を振り返っていたらもう夕方だ。

引越しの準備はまだ少しも進んでいない。

「まいったな」

そうつぶやいて作業を再開した。

（後書き）

初投稿です。右も左も分かりません。なんか似たのを見たことあり、
という方も未熟者の初投稿をご笑覧いただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2638e/>

キセキノキオク

2010年12月13日16時27分発行